



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかは
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入レポートする。

大学院美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復彫刻研究室 藪内佐斗司教授

Conservation Course Sculpture Laboratory
Graduate Department of Conservation
Graduate School of Fine Arts

研究室探訪

第四回

Visiting the Laboratory

太い木材を鋸で切り、鑿のみをふるい細かな処理を施す。別の部屋では粘土で仏像の形をつくり、また漆をこねる学生も見受けられる。上野キャンパス、美術学部中央棟の地下にある保存修復彫刻研究室は、まさに現代の「工房」といった趣だ。

この研究室は、一九六八（昭和四十二年）に文化財保護委員会から文化庁が生まれた時代に、文化財保護の現場で働く人材を育成するために、藝大の修士課程に設置された文化財保存修復技術講座彫刻研究室がもたれている。一九九五（平成七年）には大学院美術研究科文化財保存学専攻が組織され、保存修復、保存科学、システム保存学の三つの研究分野のうち、保存修復の中の彫刻研究室として現在に至る。

「藝大の前身である東京美術学校の設立に大きく貢献した岡倉天心は、日本の伝統美術の研究と技術の保存を重要な課題と位置づけ、文化財保護の原点をつくりました。その意味でこの研究室自体の歴史は古いものではありませんが、東京美術学校創立の理念を正統的に引き継ぐものだと言えるでしょう。」

このように語る藪内佐斗司教授は、藝大美術学部と大学院美術研究科で彫刻を学んだ後、当時はまだ小さかった保存修復技術研究室で六年間、仏像の修復に携わった。その後独立して二十数年間、彫刻家として個性的な作品を次々と発表した。とくに二〇一〇（平成二十二年）の平城遷都一三〇〇年祭公式キャラクター「せんたくん」は大きな注目を集めた。

日本における彫刻文化財の大半は仏教



日本が誇る彫刻文化財である仏像の修復と保存を、大学で学ぶ意義は大きい。

彫刻で、研究室で扱うのも木彫仏がほとんどである。こういった木彫仏を含め、文化財修理の基本原則では、現状を優先するか、当初部材を優先するかが大きな分かれ目になるという。何百年も前につくられ、いまわれわれの目の前にある仏像を後世にどのように伝えるかというとき、単なる資料ではなく仏教的世界観を表現したものであることを、学生にはまず学んでもらうそうだ。このことから歴史的彫刻を同じ材で忠実に模刻することが、重要な研究課題となる。

藝大美術学部の彫刻科を卒業した小島久典さん(博士一年)は、「ものを一からつくることも意義だけれど、直して喜ばれることはもっとシンプルに幸せなことじゃないか」と保存修復を志した理由を述べる。さらに西洋の彫刻技法とは異なる、日本の伝統技法に刺激を受け続けているという。田之上愛さん(修士一年)は多摩美術大学美術学部の彫刻学科卒業。大学一年のとき、高知県の山間のお堂にお祀りされていた平安時代の木彫仏をさわらせてもらったことが、修復家をめざすきっかけになった。地域の住民から大切に信仰されてきた歴史の重みを感じ、こういった文化遺産を守り、伝えていきたいと思ったのだそうだ。

研究室では、教育研究活動のほかに、出版事業や研究発表報告展、加えて受託事業にも力を入れている。文化財修復の意義に対する認識が広がるなかで、保存修復が果たす役割はこれまで以上に大きくなってきている。